法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-19

【書評】大森一三『文化の進歩と道徳性:カント哲学の「隠されたアンチノミー」』(二〇一九年、法政大学出版局): 「隠されたアンチノミー」からカント哲学を読み直す

AIHARA, Hiroshi / 相原, 博

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU: BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2021-03-30

大森一三『文化の進歩と道徳性 ――カント哲学の「隠されたアンチノミー」」 (二〇一九年、法政大学出版局)

「隠されたアンチノミー」からカント哲学を読み直す

相原

博

所決 ── カントにおける文化の進歩と道徳について』を加本書は、著者の博士論文『隠されたアンチノミーとその

カントによれば、純粋理性は自分が答えられない問いに筆および修正したものである。

見なされて、研究の主要な対象になってきた。ところが著におけるアンチノミーは、「抗争」のいわば「ひな型」と求したと考えられるからである。そこで『純粋理性批判』が定的な意味をもっている。というのは、アンチノミーが決定的な意味をもっている。というのは、アンチノミーがする。この理性批判の成立を考える上で、アンチノミーは直面して、その権限や能力の範囲にかんする批判を必要と直面して、その権限や能力の範囲にかんする批判を必要と

すなわち、アンチノミーは、たとえ定式化されないとして者は、アンチノミーについて驚くべき主張を展開している。

あろう。それゆえアンチノミーは、晩年にまで至るカント『判断力批判』以後も潜在していたと考えることも可能でのみならず、カントの思考全体を規定していたとすれば、いる」のである。アンチノミーが、理性批判の契機であるも、『判断力批判』以後のカントの諸著作にも一隠されて

の思考を読み解く鍵かもしれないのである。

とは、道徳的に生きるために文化を不可欠と見なす立場と、の原型となるものである。「文化と道徳とのアンチノミーることを明らかにする。それは「文化と道徳とのアンチノミー断力批判』の方法論に「隠されたアンチノミー」が存在す断の内容を簡単に紹介してみたい。本書はまず、研究本書の内容を簡単に紹介してみたい。本書はまず、研究

れないとしても、この「アンチノミー」はその後のカントは、文化が道徳と相いれないと考える立場を考慮できために、文化が道徳と相いれないと考える立場を考慮できなかった。そのため、「文化と道徳とのアンチノミー」は との矛盾・対立である。カント自身は、この矛盾・対立文化が道徳と相いれず、道徳的な生を阻害すると見なす立

かんするカントの議論に読み取ることができる。

の思考の道筋を決定していた。それは、

教育と法、

宗教に

場と、 由を獲得するのである。 という態度を強制されることで、 ントの教育思想において、 は「理性の開化」によって解決される。言い換えれば、 の矛盾・対立である。著者によれば、この「アンチノミー」 ミー」は、道徳教育のために強制が必要であると見なす立 制とのアンチノミー」として定式化する。この「アンチノ る。それを著者は、カントの教育思想における 自分で考える」という態度である。 まず『教育学』に「隠されたアンチノミー」が存在す 道徳教育のために強制は不要であると見なす立場と 道徳化のために強制されるのは 逆説的ながらも、その自 理性は「自分で考える」 「自由と強 カ

する。それを著者は、「自立と平等とのアンチノミー」とまた『理論と実践』に「隠されたアンチノミー」が存在

アンチノミー」という観点から『判断力批判』

以後の諸著

チノミーの定式および内容の変化に注目して、「隠された

それでは、本書はどのように評価できるだろうか。

アン

闘い」によってのみ、

解決されることが可能である

ノミー」の解消が可能となるのである。
して定式化する。この「アンチをおよび社会的な不平等の改善が行われるならば、「アンチおよび社会的な不平等の改善が行われるならば、「アンチおよび社会的な不平等の改善が行われるならば、「アンチンミー」の解消が可能となるのである。

宗教共同体が純粋宗教信仰へ接近しようと試みる「永遠の在する。それを著者は、「宗教共同体と倫理的共同体とのとは、宗教共同体が人間の道徳的進歩のために必要であるどころか、道徳性を破壊すると見なす立場と、宗教共同体が道徳的進歩のために必要であるどころか、道徳性を破壊すると見なす立場との矛盾・対るどころか、道徳性を破壊すると見なす立場との矛盾・対るどころか、道徳性を破壊すると見なす立場との矛盾・対るどころか、道徳性を破壊すると見なす立場との矛盾・対るどころか、道徳性を破壊すると見なす立場との矛盾・対るどころか、道徳性を破壊すると見なすがある「永遠の在するという。

が明らかになった、と言っても過言ではない。 る。それゆえ、本書によってカント哲学の「今日的な意義 対して、カント哲学の立場から一定の解答が与えられてい と法および宗教にかんするカント哲学のアクチュアリテー としての読み方を提起したのである。さらに本書は、 そうした研究の状況を逆手にとって、「アンチノミー」論 研究者があまり注目しない箇所であった。ところが著者は、 こしたことも、注目に値するだろう。この「方法論」は、 方法論」から、「隠されたアンチノミー」の議論を説き起 ど考察されない とを考慮すれば、著者による読解は、カント研究に「新し が教育と法、宗教という文脈で、別々に考察されてきたこ かれている。これまでの研究史を顧みても、それらの著作 と道徳との矛盾・対立という枠組みのもと、 という、 トを示したことにもなるだろう。 伝統的形而上学や神学の影響を受けた議論として、 い視座」を提供したことになるだろう。 教育と法および宗教における普遍的かつ喫緊の 本来ならば独立した分野に属する諸著作が、文化 『判断力批判』の付録「目的論的判断 著者自身も指摘 また、従来ほとん 見事に読み解 してい カント 問題に 教育 力の

なお積極的に評価すべき本書だが、疑問に思われる議論

組みを外して考えたとき、本書における「隠されたアンチ 囲と権限が明らかになるのである。しかし、理性批判の そして判断力) の定式化と解決をとおして、 と解決は、 者の見解ではあるが、カントによるアンチノミーの定式化 るためにも、さらなる解明が必要ではないだろうか。 アンチノミー」について、その定式や内容を正確に理解す が、最後に疑問点を挙げておきたい。 がないわけではない。本書の価値を否定するものでは ろうか。著者の考えでは、 ノミー」の成立とその解決は、そもそも何を意味する 広義の理性批判の一環であろう。アンチノミー の限界が示されるとともに、 カントは、教育と法および宗教 理性(理論理性と実践理 第一に、「隠され その使用 な 0 枠

ろう。

本書では、

『教育学』と『理論と実践』、

『宗教論

たしかに積極的な評価に値するだ

作を読み解いたことは、

成立の根拠として不十分ではないだろうか。 と反道徳性)を指摘するだけでは、「隠されたアンチノミー」 と反道徳性)を指摘するだけでは、「隠されたアンチノミー」 のだろうか。あるいは、認識能力の批判に関係しないので のだろうか。あるいは、認識能力の批判に関係しないので

収まらないはずである。たとえば、教育は、特殊な行動様育も法も、そして宗教も、本来ならば文化という枠組みにう観点で、教育と法および宗教を論じている。しかし、教第二に、著者は、『文化と道徳とのアンチノミー』とい

論じることの意義や理由を示すべきではなかっただろう論じることもあるのではないか。さらに宗教には、たしかに儀ることもあるのではないか。さらに宗教には、たしかに儀れや儀式など文化的な要素が含まれている。しかしながられ、宗教の意義は、文化に尽きるわけではないであろう。むしん、宗教の意義は、文化に尽きるわけではないであろう。むしるのではないだろうか。あるいは法も、社会の法制度は文名のではないだろうか。あるいは法も、社会の法制度は文式として文化的な要素を含むにせよ、教育自体が文化を作式として文化的な要素を含むにせよ、教育自体が文化を作

か。

66